

ひとり芝居『天の魚（いを）』までの変遷

『ひとり芝居「天の魚」』と云う台本のタイトルは、「苦界浄土（作・石牟礼道子）」の中の1章である「天の魚」の部分を、川島の師である砂田明氏が舞台用に構成したものです。そしてこの台本は、これに手を加えて川島が潤色したものです（「天の魚」の章の部分を抜粋して脚色）。

1971年、水俣病が大きな社会問題として動き始めた頃、「劇・苦界浄土」の全国巡演（東京→水俣）が始まりました。砂田明氏が代表をしていた劇団有志（川島を含めたメンバー）と、水俣病を告発する会のメンバーを加えたプロ、アマ10数人が参加しました。

そして再演を重ねた後、72年には家族と共に水俣に移住して「不知火座」の看板を掲げた。それは、百姓をしながら、根元からの自己変革を目指してのものだったのです。

79年には、水俣病の犠牲となった患者さんや生類全てを祭るべく「乙女塚」を建立して塚守となり、同時に舞台創りを模索している中、ひとり芝居『現代夢幻能「天の魚」』、『海の胎』を発表したのです。

やがて、全国に向けての舞台を発信するためには、上演時間や演出などにひと工夫を加える必要があるとの考えのもと、川島の師である演出家の岡村春彦氏の協力を得ることになりました。そこで、私を含めたスタッフ3人が水俣に赴き、砂田氏を交えて新たな『天の魚』が出来上がったのです。

とは言え、なに分にも貧乏所帯の若者グループ、思うように制作が進まないために頓挫しそうなことも度々ではあったが、岡村氏を始めとするベテラン方の支援を得て上演に漕ぎつける事が出来たのです。

そして「木馬亭（浅草）」を舞台として、新たな全国展開がスタートする運びとなったのです。

しかし、私たちが憂慮していたのとは裏腹に、当時の社会情勢もあってか、私たちスタッフの心配を大きく裏切る反響になったのです。入り切れない観客が押し寄せて、その日のうちに追加公演を設けなければならない状況となったのです。

そして数日間にわたっての公演は大成功に終わり、それ以降、砂田夫人との夫唱婦隨の舞台は、病に倒れるまで556回の舞台を重ねることとなったのです。

この舞台は二部形式でもって告発性の高い構成となっており、後半の舞台がひとり芝居の「夢幻能・天の魚」となっていました。

だが砂田氏の逝去以来、舞台は十五年もの空白期間が続きました。そこで関係者の間からは、次第に再現が切望されるようになったのです。その継承者として、メンバーの中でただひとり役者生活を続けていた私が、その対象者として名指しされるようになり、何かにつけては説得されるようになって行きました。

とは云うものの、あまりに荷が重すぎる任務に、私は逃げ回る事しか出来ませんでした。水俣に移住してまで患者さんに寄り添い、苦悩の末に創り上げた「天の魚」を簡単に出来

るはずもなく、継承する気持ちすら持ち合わせていなかったからです。

だが、水俣病公式認定五十年を迎えようとしていた中、丁度私も翌年に還暦を迎えようとしていました。その上、水俣病問題が半世紀になってもなお未解決。更には、苦勞をかけたまま、還暦でこの世を去らせてしまった母の年齢にも重なって、私を「苦界浄土」の再読へと向かわせたのです。

そこで、本棚の奥から埃をかぶったままになっていた「苦界浄土（石牟礼道子・作）」を探し出しました。久し振りに再会した「苦界浄土」でした。手垢と赤線で引かれた部分に触れ、当時の感情が疼き出しました。当時と変わらぬ、この石牟礼作品に対する感動とショックの入り混じった、怒りにも似た激震が走ったのです。この当時の感情が残っていたことによって、この舞台に対する微かな決意が芽生え出したことは否めないものとなりました。

ただ、水俣に対する師の並々ならぬ思いがあって誕生したひとり芝居「天の魚」、継承者と云う言葉などとても使えません。とは言え、この舞台をそのまま葬り去らせるには胸が痛みます。

そこで、鎮魂劇、告発劇的な要素のある二部形式の舞台を「天の魚」だけの舞台にして、少し脚色をして、演劇としての舞台に仕立て上げれば、自分にもやれる資格が出来るのではないかとの結論に達しました。その為には、杢太郎少年の母親を登場させることによってストーリー性を持たせなければ成立しないのではないかと思ったのです。

更には、砂田版・『夢幻能「天の魚」』ではなく、日常生活を描く事で以てリアリティー感を出す事が出来れば、水俣病による差別、家族崩壊、家族の絆等を浮かび上がらせることが可能になるのではないかと思ったのです。

此の舞台となる江津野老の家族もそれに違わぬものがあるように思われます。胎児性水俣病患者である孫の杢太郎少年の母親は、実家にも水俣病患者が出て里に帰郷せざるを得なくなってしまう。嫁ぎ先の江津野家のみならず、実家にまで被害者が出た事によって、日々の治療代すら事欠くことになってしまったのである。やがて実家から働きに出る羽目に陥り、嫁ぎ先の江津野家には二度と・・・

砂田氏の台本にはこの部分などが省かれていた。水俣に移り住む身にすれば、現存する者たちを舞台に上げるのは難しかったのかも知れない（実在する家族がモデル）。そこで、これら「天の魚」の章の中にある「九竜権現さま」の一部分である、水俣病を業病として忌み嫌ったり、伝染病などのデマに依って起こる差別などを書き加えるなどして、日常をリアルに描き、能様式の部分を自分なりに表現することに徹しました。

このように台本を潤色することでもって、周りの支援者の方々の協力を得て公演を続けています。

また私と演劇学校の同期であり、砂田氏のもとで演劇を学んで、水俣巡礼団、「劇・苦界浄土」「天の魚」と、常に砂田氏の傍に寄り添っていた白木喜一郎氏が、この舞台も支えてくれています。演出協力・舞台監督・音響・その他、諸々な複数の役割を担って頂きなが

ら行動を共にしています。

またこの台本は読みやすいように、分かり易いようにト書きを加え、漢字に置き換える（石牟礼作品とは異なって）などして、舞台の台本形式にとらわれずに、映像脚本のようなスタイルに仕立てています。

川島宏知

【川島宏知 Kawashima Kohchi プロフィール】

本名 小松敏宏 (S21・7・15)

出身地 高知県宿毛(すくも)市

サイズ 171cm 66kg B/96cm W/82cm H/95cm S/26・5cm

[略歴] 舞台芸術学院、地球義塾(砂田明氏主宰)を経て劇団「三十人会」入団。同劇団解散後、「立動舎」(演劇企画・制作/福田善之<劇作家・演出家>・朝倉摂<舞台美術家>)にて演出助手等を経験した後、俳優活動を再開。傍ら、MCを10数年間勤める。

現在、ひとり芝居「天の魚(いを)」(石牟礼道子一原作・苦海浄土より)を全国展開中。

※京都・東本願寺(法然没後800年・親鸞没後750年記念事業公演)・東京大学駒場公演・新潟りゅーとぴあ能楽堂公演他。

※小説「想憶のシンフォニー」(文芸社)出版(2017・11)

[その他の出演作品]

- <舞台> 三人姉妹(A・チェーホフ/ヴェルシーニン役)・ガラスの動物園(T・ウィリアムズ/ジム役)・背信(H・ピンター/ジム役)・終わりに見た街(山田太一/宮田役)・道元(道元役)・その他「四十七歳の秋」などの小松幹夫作品シリーズ・他
- <映画> 郷愁(中島丈博 監督)・ゆれる(西川美和 監督)・幸福の鐘(SABU 監督)・エラン・ヴィタール(塚本信也 監督)・四万十川(恩地日出夫 監督)他
- <TV> 大河ドラマ 「炎立つ」(橋田胤種役)・「八代将軍・吉宗」(山村長太夫役)・「徳川慶喜」(河津伊豆守三郎太郎役)・「元禄繚乱」(老中役)・「大地の子」・「權」・「独身送別会(銀河小説)」・「マチベン」・御宿かわせみ(第三章)・「相棒」・「夫婦善哉」・「税務調査官」・「はみだし刑事純情派」・「仮面ライダー龍騎」
- <Vシネ> 「新・麻雀放浪記」・「外道」・「おとこ唄」・「修羅のみち」・「真・雀鬼」・「ゾンビ屋れい子」
- <ラジオ> 「ふたりのロッチ」(NHK・FM)・「西暦2000年の孤独について」(東京・FM)・「春の光の庭」(NHK・FM)・「パパラナイト」(文化放送・ゲスト出演)
- <アテレコ> 「青い自転車」(3～6話)・「ヴァイキング～海の覇者たち～」・「ムント」(アニメ)
- <ナレーション> 論語集(カセットブック)・竜馬からの手紙(パーフェクトTV)・アジアレポート(MX・TV)・しまじろうのわお!(1話～・TV東京)・その他TV、映画、PV、舞台、車内アナウンスなど
- <CM> NTTドコモ・ポーラ化粧品・ナショナル/パナFAX/富士通・JR東海(Xマス・エクスプレス)・大阪ガス・富士フィルム・小林幸子「おもいで酒」TVCF/恋人役